

戦争の思い出―兄の死、疎開

福田きみ 鹿沼市

●兄の思い出―二度目の召集

私は新潟県の生まれです。今は上越市となりましたが、古くは高田市といいました。

私には3歳年上の兄がいました。兄は高田高校を卒業すると、すぐに名古屋に家業の呉服屋を継ぐために見習いに出てゆきました。21歳になると徴兵検査です。その頃は国民皆兵でしたから、それを受け、合格しました。そして兵隊になりました。

高田には三十連隊という軍人の集まるところがあつて、兄はそこで訓練を受け、中国大陸に渡って行きました。そこで2年の兵役を終え、やっと帰って来ました。

兄は兵役中マラリヤにかかりました。戻ってきたからもマラリヤで苦しんでいるのを見ました。真夏だというのに冬の布団を被り、私にその上に乗って押さえるというのです。布団の中で震えている兄を押さえて、一緒に震えたのを懐かしく思い出します。

ようやく病気も落ち着いたかと思つた頃、今度は召集令状が来たのです。赤紙です。それを玄閣で受け取つたのは私でした。ドキドキして、これ

を兄に渡せるだろうかと思ひました。やっとマラリヤも落ち着いたのに、またです。兄は私が黙って差し出したのを受け取ると、顔色がサツと変わりました。予期していたのでしょうか…。

●兄の思い出―あわただしい別れ

一緒に召集を受けた人たちと隊を組んで、列車に乗り込んで行きました。列車の窓から言葉を交わすこともできない、あわただしい別れでした。一生懸命、小旗を振つたことが忘れられません。言葉にはできなかつたけれど、これが最後の別れと思ひました。

その後の消息は当分の間わかりませんでした。やがて中国大陸を転戦後、ガダルカナルにいることがわかつてきました。兄はここで餓死したそうです。

ある時、機会があつて高田の駅にいました。そこで、ガダルカナルで兄と一緒にいた方（高田出身の人で、私が妹であることを知っていた）に偶然会つたのです。その方は私にこんなことを言ひました。「私が今生きて居るのは、あなたのお兄さんのお蔭です」驚いて聞き返しますと、兄は引き上げの順番が来たとき、その人に順番を譲つたというのです。

どうして譲つたのだろうか。それからしばらく、順番を譲つた兄の気持ちを想像しました。そして

こんなふうに通つたのです。兄は自分の命が長くないのを悟つて、その方に順番を譲つたに違ひないと思ひました。

兄はガダルカナルから帰つてくることはありませんでした。遺骨も帰つてきませんでした。骨箱が送られてきたものの、中には石ころが入つていたそうです。25歳の短い人生でした。

戦争のために生まれてきたような兄。大人の会話をしたことのなかつた兄。年齢が近かつたため、いつも私を野球の玉拾いに連れ出した兄しか思ひ出せないのです。

●疎開

私が今住んでいる佐目町の家は、夫の父が残してくれたものです。佐目町に本名主という家があります。先祖は5、6代くらい前に田を分けてもらつてこの家を出た者です。もちろんこの田の収入だけでは食べていきません。足りない分を役場に勤めたり、先生になつたりして補つてきたようです。

夫の父の代になって、田と家を留守番に頼み、東京に出て、小石川という所に家を求めて住んでいました。私はその頃、東京の学校におり、主人と出会い結婚しました。

戦争が激しくなり、大八車で佐目の家に家財を運んだのを覚えています。一家をあげて佐目に来

たのは3月の大空襲（東京大空襲…一九四五年）で、すっかり焼け出されたからです。私はその頃2人目の子供を妊娠中で新潟の実家にいました。が、敗戦が決まり、いつまでも実家にいられないので、出産を機に佐目に来ました。

粟野街道をバスから降りたら、橋が流されてしまっていた。それで夫に背負われて川を渡ろうとして、途中滑って2人とも濡れたことが懐かしく思い出されます。

佐目での生活で苦しかったのは、食べるものがないことでした。田は農地改革政策で解放になってしまい、何一つありません。幸い疎開してあった衣類を売って飢えをしのぎました。見覚えのある自分の着物を着ている人に出会って、ハッとしたこともあります。

そのうちに、ようやく家の前の3反分を買い戻すことができ、そこを田植した時の喜びを忘れられません。丸麦だけのごはんがのどを通らなかつたこと、田を買い戻し、ようやく子供にお弁当を持たせてやるようになったことなどが思い出されます。農家の人も「着物はもういいらない」と、食糧を買いたくてもだんだん売ってくれないこともありました。

今思えば、食糧難時代を乗り越えて、よくここまで生きてきたと思っています。

8月5日の新聞に、沖縄の中村文子さんの歌が載っていました。

それほどに戦がしたい男らよ

子を産んでみよ死ねと言えるか